2018.1.21　年間第三主日

ガリラヤから福音をつげる

マルコによる福音 1:14-20

ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き、神の福音を宣べ伝えて、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と言われた。

　イエスは、ガリラヤ湖のほとりを歩いておられたとき、シモンとシモンの兄弟アンデレが湖で網を打っているのを御覧になった。彼らは漁師だった。イエスは、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と言われた。二人はすぐに網を捨てて従った。また、少し進んで、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが、舟の中で網の手入れをしているのを御覧になると、すぐに彼らをお呼びになった。この二人も父ゼベダイを雇い人たちと一緒に舟に残して、イエスの後について行った。

説教

聖書でのイエスの第一声はなにか？きょうの福音ではこう記されます。

> **「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と言われた。**マルコ 1:15

先週の福音（ヨハネ）での第一声はこうでした。

> **イエスは振り返り、彼らが従って来るのを見て、「何を求めているのか」と言われた。**ヨハネ 1:38

マタイ、ルカにもそれぞれイエスの第一声はあります。

> **そのときから、イエスは、「悔い改めよ。天の国は近づいた」と言って、宣べ伝え始められた。**マタイ 4:17
>
> **そこでイエスは、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と話し始められた。**ルカ 4:21

福音書によって第一声まちまちで、どのことばがほんとうなのかは今となってはわかりません。しかし、すべての福音書に共通な点があります。それはガリラヤでイエス宣教の第一声が発せられている点です。

洗礼者ヨハネはエルサレム付近の荒野で「悔い改めよ。天の国は近づいた」と宣教しました。イエスはヨハネから洗礼を受けた後、ガリラヤで宣教を開始しました。

> **ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き、神の福音を宣べ伝えて、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と言われた。マルコ 1:14-15**（比べてみると、イエスと洗礼者ヨハネの語る内容は一緒）

ガリラヤとは何か、またガリラヤにどんな意味があるのか？聖書を見るといろいろ書いてあります。

ガリラヤはイエスのふるさとだった。

ガリラヤで最初の弟子たちを選んだ。

故郷ナザレでは受け入れられなかった。

隣接するサマリアにいったり、ガリラヤから更に北、現代でいうシリア地方にも足を伸ばしている（イスラエルだけでなく異国にも足を運んでいる）いろいろな解答はあります。

はっきりしているのはイエスはエルサレムではなくガリラヤで第一声を発し、宣教を開始されたということです。神殿のあるイスラエルの都、エルサレムではなく異教徒の住むところ、辺境の地ガリラヤで最初に福音を説かれました。

わたしたちは聖書をとおしてイエスがエルサレムで処刑されたこと、そして復活されたことを知っています。エルサレムの神殿はイエスが処刑された４０年後にはローマ軍が壊滅したことを歴史上の出来事として知っています。そして現在でもエルサレムのユダヤ教神殿は再興されることなく、その跡地にはイスラム教の金色のドーム（岩のドーム）が建ち、ユダヤ教神殿の痕跡は壁が残るだけだということも知っています。またエルサレムの奪還（神殿の再建？）を試みた十字軍をヨーロッパ中世の歴史として知っています。十字軍の歴史はキリスト教の過去の誤りの一つとしてカトリックは認め告解しました。

この世の有様は過ぎ去るからです。一コリ７：39

きょうの第二朗読の個所で使徒パウロはこのように言い切っています。エルサレムをめぐる現在の有様（実効的にも政治的にも戦争状態のような有様）もいずれ過ぎ去っていくでしょう。また、ガリラヤも今と昔ではおおきく様変わりしていることでしょう。しかし、神の御子イエスがガリラヤで宣言したという事実はは変わりようがありません。想像力をふくらませればガリラヤでのイエスの宣言は過ぎ去ってしまう「この世」の有様ではなく、過ぎ去ることはなく、いつまでも変わることのない出来事「あの世」の有様だったのかもしれません。

ただ、いくらこの世の有様は過ぎ去ってしまうといわれても、いまも感じる肉体の痛み苦しみ、月末の支払いのやり繰り、いつまでもこころに気にかかるあのこと、しのびよってくる死の影、いまを何とかしてほしいのは人の常です。しかし、イエスはガリラヤでこう宣言されました。

時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。マルコ 1:15

このイエスのみことばがわたしたちへの真のはげましのことばとなり、信じることができますように。

（参考）第二朗読　　一コリントの信徒への手紙　7:29-31

兄弟たち、わたしはこう言いたい。定められた時は迫っています。今からは、妻のある人はない人のように、泣く人は泣かない人のように、喜ぶ人は喜ばない人のように、物を買う人は持たない人のように、世の事にかかわっている人は、かかわりのない人のようにすべきです。この世の有様は過ぎ去るからです。